



Title	中学生における仲間集団の排他性に関する尺度作成の試み：仲間を外に離さない集団規範に着目して
Author(s)	鈴木, 修斗; 加藤, 弘通
Citation	子ども発達臨床研究, 17, 33-40
Issue Date	2023-03-24
DOI	10.14943/rcccd.17.33
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88639
Type	bulletin (article)
File Information	040-1882-1707-17.pdf



[Instructions for use](#)

資料論文

中学生における仲間集団の排他性に関する尺度作成の試み

— 仲間を外に離さない集団規範に着目して —

鈴木 修斗¹・加藤 弘通²An Attempt to Develop a Scale for Peer Group Exclusivity
Among Junior High School Students

— Focussing on the Group Norm of Keeping Members Inside of it —

Shuto SUZUKI, Hiromichi KATO

要 旨

本論文では、従来の集団外成員の排除に焦点化した仲間集団の排他性について、その概念を見直し、排他的なグループにおけるグループ外の者との関係を阻害する2つの要因について検討する。一つ目は、グループ外の者がグループ内に入ることを阻害する要因「内関係阻害」、二つ目はグループ内の仲間がグループ外の者と関係をもつことを阻害する要因「外関係阻害」である。排他的な友達グループには内関係阻害と外関係阻害の2つの阻害要因が関係していると考えられるが、外関係阻害については十分な検討がされていない。

そこで本研究では、仲間集団の外関係阻害に関する暫定尺度を開発し、友達グループの外関係阻害の実態を示すことを目的とする。そのために、①項目を作成し、因子構造の検討を行い、②自由記述調査をふまえ、さらにその項目内容について検討した。

キーワード：仲間集団，中学校，排他性

Key words：peer group, junior high school, exclusivity

問題と目的

仲間集団（友達グループ）は、思春期前半から徐々に同性のメンバーで固定化されていき、グループ外の者に対して排他的であることが知られている

（井上，1992；Duck，1991；Kinderman, McCollom & Gibson，1996）。海外では、仲間集団の中でもこのように親密かつ排他的でインフォーマルな小集団をクリーク（clique）と呼び（Patricia & Peter，1998）、グループダイナミクス研究の指標の一つに排他性が

¹ 北海道大学大学院教育学院 博士前期課程

² 北海道大学大学院教育学研究院 准教授

扱われてきた。排他性はクレークの本質であり、メンバーをふるいにかけることが、その排他性を維持するうえで重要な方法とされる (Patricia & Peter, 1998)。これまでの研究から、仲間集団の排他性は、いじめなどの対人トラブルを誘発するリスク要因とされており、特に関係性攻撃 (仲間外れや無視、陰で悪口を言われるなど) との関連が指摘されている (三島, 2004; Grotperter & Cric, 1996)。

では、先行研究において仲間集団の排他性はどのように測定されてきたのだろうか。三島 (2003a) は、排他性を「自分の仲間であるかどうかによって相手に対する態度を変えたり、自分の仲間と活動することに比べ、仲間以外の児童と活動することを楽しくないと感じたりする程度の強さ」であると定義し、個人レベルと集団レベルの2側面から測定しているほか、別の研究においてもいくつか類似概念が検討されている。例えば、有倉・乾 (2007) や有倉 (2011) は、仲間と一緒にいたいという感情レベルの側面を「排他性欲求」、所属する集団の排他性の規範に対する認知レベルの側面を「排他性規範」として三島 (2003) の概念を同じ2側面からとらえ直している。

また、排他性の類似概念として黒川他 (2006a) は集団透過性について検討している。集団透過性とは、仲間でない他者と集団の境界を越えて相互作用する可能性を示す概念であり、個人の集団透過性 (個人レベル) と集団透過性 (集団レベル) に分けられる (黒川他, 2006a)。そして排除には、個人が自集団以外の他者を受け入れるレベルと集団全体で受け入れるレベルが存在し (武・渡辺・Crystal・Killen, 2003)、それぞれ黒川の個人の集団透過性と集団透過性が相当するといえる (黒川・吉田, 2009)。その一方で、個人の集団透過性は自集団から積極的に自集団以外の他者と関わるといった能動的な視点も含まれている点で排除とは異なるとされる (黒川・吉田, 2009)。

以上をふまえて、排他性は自分のグループにグループ外の者を受け入れたくない気持ちの程度を表し、それは各成員が個人として感じる程度とグ

ループ (周りの成員) の感じる程度をどのように認知しているかに大きく分けて測定されている。

しかし、これまでの排他性に関する先行研究では以下の課題があると考えられる。それは、排他的なグループでは、グループ全体として、集団外成員に排他的であっても、グループの外では自由にグループ外の者と交流している場合が考えられるにもかかわらず、排他的な友達グループに所属する子どもは、グループ外との関わりの低下が認められている (石田・小島, 2009; 黒川, 2006b) 点である。そうした背景には、グループの仲間と行動をともにしていないときにまで影響する「仲間がグループ外に出て外部と関係をもつことを引き留める」ような集団規範が関係している可能性がある。実際に、大嶽他 (2010) は、女子大学生を対象とし、中学時代の「ひとりぼっち回避行動」を回顧的に尋ねた調査面接により、「あんたあの子としゃべっちゃだめ」のようなグループ外の者と親密になることをよかれとしない束縛された関わりに関する語りの存在を指摘している。また、排他性に関わる尺度項目の中には、グループ外の者がグループに入ってくることを阻害する方向性と、グループ内の人々がグループ外の者と関わることを阻害する方向性が存在する。前者はグループと行動をともにしているときにしか作用しない一方で、後者はグループと行動をともにしていないときまで作用する点で大きな違いがあるといえるが、先行研究では両方の作用が混在している点で測定の問題がある。例えば、佐藤 (1995) は、グループ志向に関する項目の主成分分析の結果、閉鎖的集団志向得点を算出しているが、「学校では、気のあう人 (たち) だけと一緒にいたい」、「自分の仲間以外の人とはあまり話したいと思わない」といったグループ外の者に排他的な項目の中に、「自分の仲間にはほかの人とつきあってほしくない」といったグループ内の人々がグループ外の者と関わることを阻害する方向性の項目が含まれている。

以上のことから、本論文では、排他的な友達グループには2つの阻害要因が関係していると仮定し、グループ外の者がグループ内に入ってくるこ

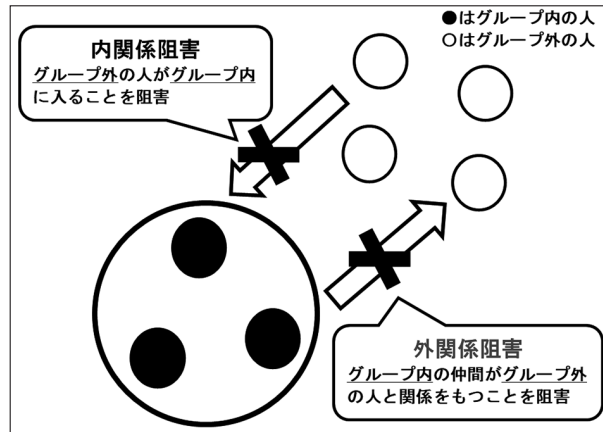


Figure 1. 排他的なグループの2つの阻害要因

とを阻害する働きを「内関係阻害」、グループ内の人がグループ外の者との関係を阻害する働きを「外関係阻害」と新たに定義し、以降論じていくこととする。Figure 1に示したように、友達グループには内関係阻害と外関係阻害の2つの阻害要因が関係していると考えられるが、外関係阻害については十分な検討がされていない。

そこで本研究では、仲間集団の外関係阻害に関する暫定尺度を開発し、友達グループの外関係阻害の実態を示すことを目的とする。そのためにまず、①項目を作成し、因子構造の検討を行い、②自由記述調査をふまえ、さらにその項目内容について検討していく。

方法

1. 調査協力者

道内の公立中学校1校に通う中学生(1年～3年)、計91名(男子46名、女子44名、その他1名)を対象とした。学年別内訳は、1年生34名(男子17名、女子17名)、2年生30名(男子17名、女子12名、その他1名)、3年生27名(男子12名、女子15名)であった。

2. 調査手続き

Webによる質問紙調査(Google form)を行った。学級ごとに担任の指示のもと、一斉にタブレット端末から回答する方式で調査が行われた。なお、当日に実施できなかった一部の生徒については、担任の指示のもと、家庭か学校で調査協力を求めた。質問紙には、倫理的配慮として、先生や友達に回答の内容が知られる恐れがないこと、成績には全く関係ないことを明記した。また、質問項目の選定にあたっては、不適切な項目がないか、調査実施校の教員によるチェックを受けた。調査は、2022年6月に実施された。

3. 調査内容

- ① フェイス項目：性別、年齢、学年、クラスの4項目
- ② 友達グループの基本情報に関する項目：
 - グループの所属有無、グループの人数、メンバーの構成の3項目
 - グループの所属有無、グループの人数については石田・小島(2009)の項目を使用した。
- ③ 外関係阻害に関する項目：個人レベル・集団レベルに分けて各6項目を作成
 - 作成にあたっては、オリジナルの項目に加え、

三島 (2003a) の排他性に関する項目のうち、「一番大切な友達を他の子にとられそうで心配になる」、「新しい友達をつくるとき、今、仲良くしている友達のことが気になる」、「一番大切な友達が他の子と楽しそうに話していると嫌な気分になる」の3項目、佐藤 (1995) のグループ志向性に関する項目のうち、「自分の仲間にはほかの人とつきあってほしくない」を参考に作成した。心理学の教員1名と心理学を専攻する大学院生4名(著者も含む)と項目の内容について確認して使用した。回答は、「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(5点)」の5件法で求めた。

- ④ グループに所属することの長所・短所に関する自由記述:「あなたが友達グループに所属していて、良かったなと思うこと、大変だなと思うことについて教えて下さい。」の1項目

4. 分析方法

本研究における分析は、HAD (ver.17; 清水, 2016) で行った。また、分析には、友達グループ有りと回答した66名を使用し、外関係阻害について個人レベル、集団レベルそれぞれについて因子分析を行った。

結果

1. 個人の外関係阻害およびグループの外関係阻害の探索的因子分析結果

まず、外関係阻害に関する全項目に対して天井・フロア効果の検討を行ったところ、天井効果が2項目、フロア効果が10項目について認められた。排他性に関する先行研究においても、排他性の尺度項目においても複数の項目にフロア効果が認められていることから(有倉, 2015)、測定の問題ではなく、むしろ外関係阻害を感じない人が多数を占めている実態が反映された結果だと考えられる。それ故に、全項目について以降の分析に用いることとした。次に、個人の外関係阻害とグループの外関係阻害の項目それぞれについてスクリープロットを参考に、固有値の変化及び解釈可能性から1因子解が妥当と判断し、個人の外関係阻害の計6項目、グループの外関係阻害の計6項目に対し、1回目の因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。その結果、個人の外関係阻害については「私は自分のグループの仲間には何よりもグループの約束を優先してほしい」(.288)の因子負荷量の低かった1項目が認められたため、その項目を除いて再度同様の因子分析を行ない、最終的に計5項目1因子構造を採用した(Table 1)。一方、グループの外関係阻害については、因子負荷量が著しく低い項目は認められなかったため、全

Table 1. 個人の外関係阻害の因子分析結果および各項目の記述統計量

項目	$\alpha = .79$	<i>FI</i>	h^2	<i>M</i>	(<i>SD</i>)
私は自分のグループの仲間がグループ外の人と楽しそうに話していると、嫌な気持ちになる		.92	.85	1.61	1.03
私は自分のグループの仲間とグループ外の人とつきあってほしくないと思う		.88	.77	1.47	.91
私は自分のグループの仲間が他の子にとられそうで心配になる		.70	.49	1.91	1.28
私は自分のグループの仲間がグループ外の人との約束を優先すると、裏切られた気分になる		.64	.41	1.72	.97
私は自分のグループの仲間がグループ外の人と関わっていても気にしない*		-.34	.11	3.67	1.47

注1) *は反転項目を示す。

Table 2. グループの外関係阻害の因子分析結果および各項目の記述統計量

項目 $\alpha = .78$	<i>FI</i>	h^2	<i>M</i>	(<i>SD</i>)
あなたがグループ外の人と関わったとき、自分のグループの仲間に不機嫌になる人がいる	.93	.86	1.39	.87
あなたが1度でもグループ外の人との約束を優先した場合、もうグループに戻れない雰囲気がある	.89	.79	1.31	.75
自分のグループには仲間にグループ外の人とつきあってほしくない雰囲気がある	.72	.52	1.53	.89
あなたがグループ外の人と関わったとき、自分のグループの仲間によく思われない	.72	.52	1.63	1.12
自分のグループにはグループの約束を何よりも優先しなければいけない雰囲気がある	.49	.24	1.78	1.04
自分のグループには仲間がグループ外の人と遊んでいても気にしない雰囲気がある*	-.36	.13	3.61	1.59

注1) *は反転項目を示す。

項目1 因子構造を採用した (Table 2)。なお、クロンバックの α 係数を算出したところ、個人の外関係阻害は $\alpha = .79$ 、グループの外関係阻害は $\alpha = .78$ 、それぞれ一定の内的一貫性が認められた。

2. グループに所属することの長所・短所に関する自由記述結果

まず、自由記述調査において得られた57名の回答について、一人の回答に文章が2つ以上ある場合、あるいは一つの文章の中に2つ以上の意味の内容が含まれる場合は、それぞれの文章・内容ごとに1件の記述としてカウントした。その際、「特になし」など書く内容がないことを意味する記述はカウントせず、最終的に、89件の内容の記述を得ることができた。それらの記述をグループの肯定的な側面に関する記述と否定的な側面に関する記述に分類したところ、それぞれ70件(78.7%)、19件(21.3%)の記述に分かれた。

グループの肯定的な側面に関する記述については「楽」、「嬉」、「面白い」が含まれるものが32件に見られ、多くの生徒がグループを楽しめるものとして認識していることが示唆された。残るグループの肯定的な側面に関する記述38件と、否定的な側面に関する記述19件については、それぞれカテゴリー化した (Table 3, Table 4)。グループの

肯定的な側面に関する記述については、人脈の広がりや情緒的な関わりに関する記述がみられた一方で、一人ぼっちの回避に関する記述がみられた。先行研究では、このような現象を「ひとりぼっち回避規範」と定義し、その背景には一人になることへの恐れが関係していることが指摘されている (大嶽他, 2007; 大嶽他, 2010)。グループの否定的な側面に関する記述については、一緒に時間がとれないこと、グループに合わせることにに関する記述が見られた一方で、外関係阻害に関する記述が3件確認された(「他の友達と居ると不機嫌になれる、他のこと仲良くしたいのに縛られるのが嫌、自分は他のこと仲良くしているのに私は他のこと話せないのが不思議」)。そのため、これらの記述を参考に、グループの外関係阻害に「自分のグループの仲間は、グループの外の子と仲良くできるのに、自分だけ仲良くしづらい雰囲気がある」という項目を加え、計7項目の暫定尺度とした。

Table 3. 友達グループの肯定的な側面に関する記述

人脈の広がりに関する記述
グループの友達を通じて他の人もたくさん仲良くなれたこと
最初の頃よりもみんな仲良くなってきたので、よかったです
最初の頃よりも、もっと仲が深まったので良かったです！
友達の輪が広がった
人脈がめちゃ広がった
仲いい人がたくさんできて休み時間とか一緒に過ごすようになった
情緒的な関わりに関する記述
助け合ったりすることができる
みんながいつも笑顔で優しいところ
話しやすい
相談できたり話を共有できる
見方になってくれる
沢山色んな話ができるから良かった
良かったと思うのは色んなことを話せた
勉強を手伝ってもらった
一緒にいるとすごく落ち着くこと
話せる人がいていい
困ったときに助けてくれる
相談できる
同じ趣味の人と話し合えることがよく思っている
困ったことがあれば相談できる
困ったときに助けてくれる
相談に乗ってくれる
話が合うしずっと話せる
一人ぼっちの回避に関する記述
一人にならないこと
ひとりじゃなくて済む
その他
必要な持ち物などを、話し合ったりするから忘れ物が少ない
学校のことで気になったことがあったときにすぐ聞ける
授業などでわからなかった事があつたら聞きやすい
一緒に行動したいとき（廊下にでたいけど誰もいないときとか）に頼りやすい
なにか話したい！ってときにすぐ話にいける
色んな人と競い合える
たまにどこかですれ違う
嫌なことがあっても忘れられる
休み時間が暇に感じないのがいい
たまに外で遊んだりできた
友達の家へお邪魔したりできる
放課後一緒に遊んだりできる
聞きやすい

注1) プライバシーに関わる記述内容は一部改変している箇所がある

注2) 一部の記述内容は読みやすいように文章の体裁を整えている

Table 4. 友達グループの否定的な側面に関する記述

外関係阻害に関する記述
他の友達と居ると不機嫌になられる
他の子と仲良くしたいのに縛られるのが嫌
自分は他の子と仲良くしているのに私は他の子と話せないのが不思議
一緒に時間がとれないことに関する記述
人数が多すぎて、全員の予定が合わないこと
授業外の活動などで休み時間会えなかったりすると残念がられたり一緒に時間が短くなってしまうことです
グループに合わせることの大変さに関する記述
時間がかかる人がいたら待ってないといけない所
グループ1人1人の気持ちを考えないといけないことが大変だと思います
ずっと一緒にいるため一人で行動することがあまりできなくなる
遊びに誘われたときの断り方が難しい
大変なことは、少し待ち合わせ時間が遅れたら、気にする
その他
大変なところはうるさいところ
大変なときは3人グループとか4人グループ作らないといけないときに人を見つけるの大変だなあとと思います
仲がよすぎて遠慮がなくて嫌な気持ちになるときがあるのが大変
テンションが高すぎて疲れる
自分の意見を聞き入れてもらえなかった
グループの友達に嫌われている気がして怖いです
大変だと思うのは、グループ内の人と喧嘩したときにグループ全体に悪い雰囲気になる
仲良くしていけるのか不安
喧嘩する

注1) プライバシーに関わる記述内容は一部改変している箇所がある

注2) 一部の記述内容は読みやすいように文章の体裁を整えている

考察

本研究の目的は、仲間集団の外関係阻害に関する暫定尺度を開発し、友達グループの外関係阻害の実態を示すために、①項目を作成し、因子構造の検討を行い、②自由記述調査をふまえ、さらにその項目内容について検討することであった。

本研究結果から、①については、外関係阻害は1因子構造で説明でき、外関係阻害を感じない人が多数を占めている実態が示された。しかし、実態が少数であっても、外関係阻害が深刻な関係性攻撃につながる可能性は否定できないことから、引き続き外関係阻害について検討が必要といえる。

②については、本研究における自由記述調査はグループの長所・短所について広く尋ねたもので

あり、目的としていた外関係阻害に関する記述は多くは得られなかった。しかし、1でも述べたように、外関係阻害は社会的に望ましくない項目であり、全く当てはまらない生徒が多数を占めている（むしろ、正規分布を仮定する方が不自然である）。したがって、この自由記述調査の結果はある程度、実態を反映したものと捉えられ、むしろ、少ないサンプルサイズの中でも、外関係阻害に該当する記述があったことに、外関係阻害を検討する意義があると考えられる。

今後の課題としては、主に2つのことが挙げられる。

第1に、本研究はサンプルサイズがかなり小さい点である。友達グループの外関係阻害尺度について、より大規模なサンプルサイズで因子構造を

検討していく必要がある。

第2に、外関係阻害が実際に関係性攻撃をすること（されること）につながるのか検討できていない点である。排他的な友達グループの内関係阻害と外関係阻害の両方の観点から関係性攻撃との関係を明らかにしていく必要がある。

文献

- Duck, S. (1991). Friends, for life: The psychology of personal relationships. Harvester Wheatsheaf.
- (ダック S. 仁平義明 (監訳) (1995). フレンドーズキル社会の人間関係学— 福村出版)
- Grotjeter, J. K., & Crick, N. R. (1996). Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, 67, 2328-2338.
- 井上健治 (1992). 人との関係の広がり 木下芳子 (編) 対人関係と社会性の発達 金子書房 pp. 3-28.
- 石田靖彦・小島文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連: 仲間集団の形成・所属動機という観点から 愛知教育大学研究報告, 58, 107-113.
- Kinderman, T. A., McCollom, T. L., & Gibson, E., Jr. (1996). Peer networks and students' classroom engagement during childhood and adolescence. In K. Wentzel & J. Juvonen (Eds.), *Social motivation: Understanding children's school adjustment*. New York: Cambridge University Press.
- 黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和 (2006a). 仲間集団から内在化される集団境界の評定 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 53, 21-28.
- 黒川雅幸 (2006b). 仲間集団外成員とのかかわりが級友適応へ及ぼす影響 カウンセリング研究, 39(3), 192-201.
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2009). 仲間の存在と個人の集団透過性が学習半活動に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 49, 45-47.
- 三島浩路 (2003a). 小学校高学年のインフォーマル集団の排他性に関する研究 生徒指導研究, 15, 51-56.
- 三島浩路 (2003b). 小学校教師がイメージする男子・女子児童の「いじめ」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 50, 123-132.
- 三島浩路 (2004). 友達関係における親密性と排他性: 排他性に関連する問題を中心にして 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 51, 223-231.
- 大嶽さと子 (2007). 「ひとりぼっち回避規範」が中学生女子の対人関係に及ぼす影響—面接データに基づく女子グループの事例的考察 カウンセリング研究, 40, 267-277.
- 大嶽さと子・多川則子・吉田俊和 (2010). 青年期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する捉え方の発達の变化—面接調査に基づく探索的なモデル作成の試み— 対人社会心理学研究, 10, 179-185.
- Patricia A. Adler & Peter Adler. (1998). *Peer Power: Preadolescent Culture and Identity*. (パトリシア A. アドラー&ピーター. アドラー. 住田正樹 (監訳) (2017). *ピア・パワー: 子どもの仲間集団の社会学* 九州大学出版会)
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, 3, 11-20.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 武 勉・渡辺弘純・Crystal, D.S.・Killen, M. (2003). 人間の多様性への寛容 —児童生徒の仲間集団への「受け入れ」に関する日中比較研究— 愛媛大学教育学部紀要 (第一部教育科学), 50, 25-41.
- 有倉巳幸・乾 丈太 (2007). 児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 (教育科学編), 58, 101-107.
- 有倉巳幸 (2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部教育実践紀要, 21, 161-172.
- 有倉巳幸 (2015). 中高生版仲間集団排他性尺度の開発 鹿児島大学教育学部教育実践紀要, 24, 227-237.

付記

本論文は第一著者が令和4年度に北海道大学大学院教育学院に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。最後に、調査にご協力いただいた中学校の皆様へ感謝申し上げます。